

【MedSci Forum】 1期生に対する進学に関するアンケートから

桐技会企画

前号に引き続いて、1回生から進路に関するアドバイスをもらいました。今回のテーマは「進学」です。大学院や細胞検査士の学校に進学した皆さんに、次の質問に答えてもらいました。

- ①進学先を教えてください。
- ②進学先はどのような経緯で選びましたか。(筑波大院医科学以外の方はより詳しくお願いします)
- ③入学以降、どういった生活を送っていますか。(授業の内容や1日の研究室での過ごし方など)
- ④進学先でのタイムスケジュールはどのようなものですか。(就職活動、修士論文作成、博士課程入試など)
- ⑤進学先を修了・卒業した後はどのような進路が考えられますか。

1回生 A・H

①筑波大学大学院人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻

②近いから

③授業内容:医療科学と大半が被るため、時々出席。1日の研究室での過ごし方:mail チェック→研究室にて自習→研究室の先生達と昼ごはん→研究室にて自習 or セミナー→帰宅(20時ごろ)

セミナーは週2回行っています。そのほか、大学主催の講演会に参加したりしてます。当研究室では、自習場所は指定されていませんので、図書館で行う事もあります。質問をすぐ聞けるというメリットがあるので、研究室で行っています。

④就職活動:年明けから本格化。現在真っ最中です。修士論文作成:私は、1月に移動したの

で、これからテーマを絞って決めます。その後、就職活動と同時進行で調査・考察し、書きます。

⑤企業に就職希望しています。

1回生 H・M

①筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻

②医科学の研究室で卒論を書いたがもっと対人関係の研究がしたいと思い、以前から興味があった高齢者の健康増進に関する研究室に行きたいと考えた。ネットで人間総合科学・体育科の大学院を調べ、教授のプロフィールやその教授が今行っている研究の紹介などから、その教授と連絡をとり、実際に会って話し合った結果体育科の大学院を受けることにした。

③1年生では、1日2,3コマの授業にでて、空いた時間は研究室で論文を読んだりレポートを書いたり、実験計画を考えたりする。基本、研究室は強制的ではないので、授業のない日は1日自宅で作業することもある。週に一回は研究室のゼミで各自の読んだ論文(英語)発表をきいて討論会(自分の発表する頻度は月に1度程度)。

授業は医療科学時代に比べれば格段に少ないため比較的自由な時間が多いが、何もしようとしなければあっという間に一年たってしまうので、自分で勉強する積極性が大事。

④一貫性博士課程は来年度からなくなるが、タイムスケジュールはほぼいっしょ。2年のうちに30単位を得る。2年で修論作成→研究報告会→中間審査→修士号。5年までに博士論文作成→研究報告会→予備審査→本審査→博士号。

⑤まだあまりわかりませんが…

・博士号をとって研究者や大学の講師など。

- ・海外への留学。
- ・修士号をとって教師、企業、NPOなど。

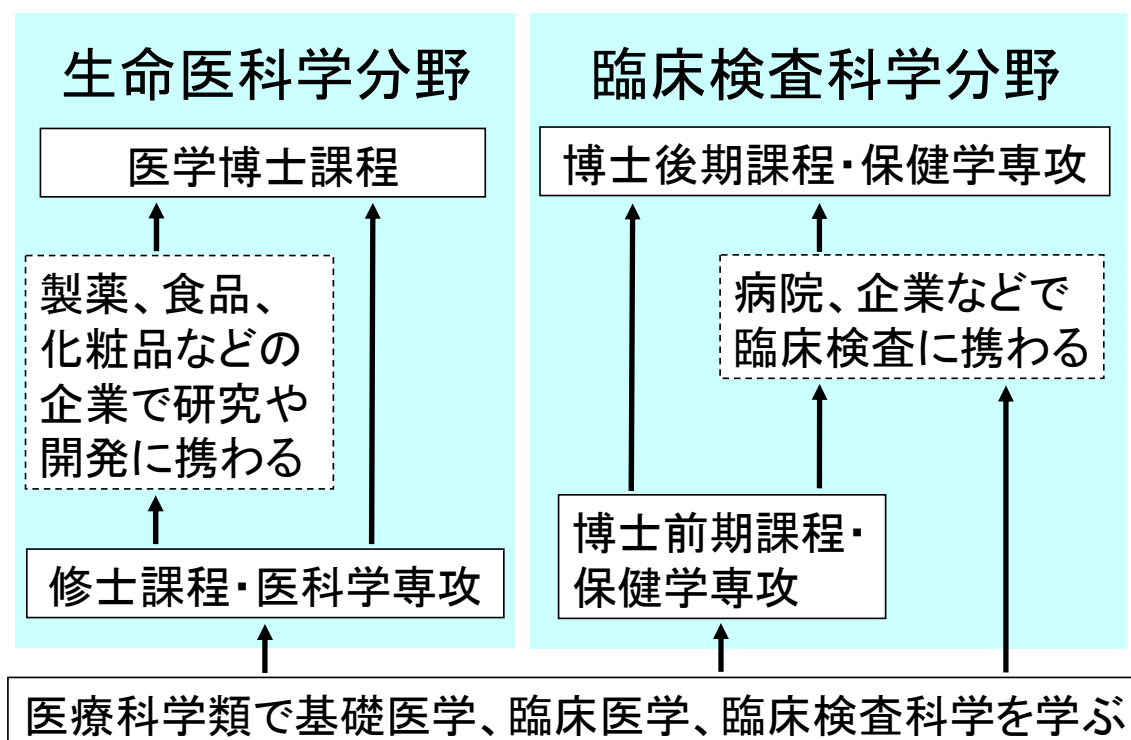
1 回生 Y・A

- ①筑波大学大学院人間総合科学研究科フロンティア医科学専攻
- ②卒業研究を行った研究室に進学した。
- ③1年生の1学期には毎日授業があったが、学期が進むにつれて少なくなる。授業の内容としては、看護・医療科学類で学んだ基礎医学や臨床医学に関するものが多い。しかしながら臨床医学と社会医学の授業については、看護・医療

科学類よりも充実していると思われる。授業に出席するとともに、実験を継続して行っている。

④企業に就職する場合、就職活動は1年生の秋ごろから始める。博士課程の入試は2年生の夏あるいは冬に実施される。修士論文については、2年生の秋に中間発表があり、年明けに最終発表と論文審査がある。

⑤図に示すような進路が考えられる。ただし、この図では主な進路を示しており、本人の希望により他の進路もある。同級生の話によると、多くの人は企業への就職を希望しているという。



注:この図は主な進路を示すものです。

1 回生 T・N

①癌研有明病院付設細胞検査士養成所

②もともと病理診断に興味があったということもあり、細胞検査士の資格をもっていれば病理に就職しやすいのではと考えていた。実習の時に大学病院の細胞検査士の方に相談したところ、上記の養成所の存在を教えていただき、受験することを決意した。

③第一の目標としては、細胞検査士の資格試験合格を目指す。基本的には日曜・祝日と第 2、4 土曜日は休み。毎日養成所に行き、一日中(9 時～17 時)細胞診について学ぶ。試験には一次試験が学科試験、二次試験が実技試験なので、午前中に講義、午後に実習という授業が多かった。また授業後はルーチンの標本を見て自分なりの診断を付け、添削してもらい、実践力をつけることが出来る。生徒が 14 人という少ないので、講師の方とマンツーマンに近い状態で授業を受けることができるし、人数が少ない分同期の絆は強く、旅行にいったり飲みに行ったり充実した生活を送ることが出来た。

④2 月:入学試験

4 月:入学式

7 月:日本臨床細胞学会出席

8 月:中間試験

10 月:卒業試験、卒業式、一次試験

12 月:二次試験、合格発表

⑤基本的には病院、検診センターなど、細胞診業務を行うところに就職している。その他大学院への進学、研究領域での活躍もあり得る。形態学的に癌細胞を認識できる細胞検査士は細胞診の領域だけでなく、癌研究領域でも求められているということを講師の方から教えてもらったことがあります。私は今大学病院で細胞検査士として勤務していますが、個人的には研究領域にも興味があるので細胞検査士の特徴を生かし

て癌の研究をしてみたいという気持ちがあります。